

生き続ける建築 — 11



生活芸術を追及したモダニズムの啓蒙家



おおかわ・みつお——日本大学理工学部建築学科 教授／1950年生まれ。日本大学理工学部、同大学大学院修了。工学博士。専攻は日本近代建築史。主な著書：『近代日本の異色建築家』（共著、朝日新聞社 1984）、「近代和風建築 伝統を超えた世界」（共著、建築知識 1992）、「図説 近代建築の系譜」（共著、彰国社 1997）、「新版 図説・近代日本住宅史」（共著、鹿島出版会 2008）など。

【*1】三橋四郎（1867～1915）幕府旗本鈴木家の四男として生まれ、三橋家を継ぐ。東大建築学科卒業後、陸軍省、通信省、東京市の技師を経て独立。論客で帝国議会議事堂の“様式論争”に参加。鉄網コンクリート造の考案や、わが国初の建築学体系『和洋改良 大建築学（全4巻）』（大倉書店1904～11）の著者として知られる
【*2】関根要太郎（1889～1959）埼玉県生まれ。秩父郡立農学校を卒業後、請負の職を点々とする中、三橋四郎の事務所で初めて本格的に建築と出会う。東京高等学校卒業後、不動貯蓄銀行（現・りそな銀行）の子会社である日本建築に就職し、同銀行の支店を中心に設計活動を行った
【*3】曾禰中條建築事務所 曾禰達蔵（1852～1937、『INAX REPORT』No.167、p4～参照）、中條精一郎（1868～1936）が1908年に設立。大正・昭和戦前期を代表する設計事務所で、東京・丸の内への「東京海上ビル」、「郵船ビル」などを設計。英国滞りの中條は、大正・昭和戦前期において建築家の職能確立運動に尽力。若手所員も参加したことから、事務所は運動の拠点としての趣があった
【*4】『建築家の修養（1～3）』『建築雑誌』1910.9～11
【*5】佐藤功一（1878～1941）（INAX REPORT）No.170、p.4参照）
【*6】分離派建築会（INAX REPORT）No.174、p.4参照）
【*7】平和記念東京博覧会 1922年に上野の山を会場として開催された。この博覧会最大の呼び物は「文化村」の展示で、上野公園の一面に14棟のモデルハウスが展示された。坪建20坪、坪単価200円以内ですべてが洋風化された生活様式を想定して設計。1,000万人以上の入場者を集めた。これを機に「文化住宅」という名称が生まれた
【*8】今和次郎（1888～1973）青森県弘前市生まれ。東京美術学校（現・東京藝術大学）図案科卒業後、早稲田大学勤務。師の佐藤功一の誘いで、日本の民家研究の先駆者となる。後に視点を広げ、現代社会の風俗、習慣、生活等を研究対象とする考現学、生活学等の新しい学問領域を切り開いた
【*9】中村鎮（1890～1933）（INAX REPORT）No.171、p.5参照）

蔵田周忠

Chikatada Kurata



日本における建築モダニズムは、大正9年(1920)の分離派建築会に始まる。彼らがよりどころとした表現派の造形は、構成派の美学を経て、インターナショナルスタイルへと大きく変化していった。1920年代から30年代はモダニズムにとって激変の時代…。蔵田周忠の生涯は、こうした動向と見事に重なり合う。蔵田の名が建築界で頻繁に登場するのは、昭和戦前期の建築ジャーナリズムである。特に海外情報を特徴としていた「国際建築」や「新建築」では、欧州の建築界の息吹を伝え、毎号のように誌面を賑わせていた。と、同時に1930年代に登場する“白い箱モダニズム”の住宅を手がける代表的な建築家でもあった。建築家、建築評論家、編集者、教育者、さらには民家研究者、家具デザイナーなど、“生活をデザインする”を主軸に幅広い活動をした、多才で努力の人・蔵田周忠の軌跡を辿った。



蔵田周忠は、明治28年（1895）2月26日、濱岡家の長男として山口県萩市に生まれた。上京して工手学校（現・工学院大学）に学び、大正2年（1913）9月、卒業と同時に三橋四郎建築事務所に職を得た。三橋四郎【*1】は東大卒で、草創期の逓信省官繕を担った逸材である。三橋は、早くから建築ジャーナリズムに対しても関心を示し、通信技師時代には私財を投じ、民間の建築雑誌『建築世界』を支援し、所員の浜松義男に編集を任せていた。蔵田はその口絵デザインを担当していた。しかし知的な雰囲気にも包まれた事務所時代は、大正4年（1915）9月、三橋が出張先のウラジオストックで逝去したことで突如中断されてしまった。

その後、事務所の先輩である関根要太郎【*2】の紹介で、曾禰中條建築事務所【*3】の製図員の職を得た。日本最大規模の設計事務所として優れた人材が数多く集まっていたが、製図員である蔵田を誰よりもかわいがってくれたのが高松政雄である。高松の東大での卒業論文「建築家の修養」【*4】は建築論史に名を残す論文で『建築雑誌』にも掲載された。ジョン・ラスキンの思想を核としたその建築論は、多くの若い建築家たちの心を捉えていた。高松と蔵田は仕事の合間をみても熱い建築論を語り合った。“生活と芸術”の理想を掲げたラスキンの影響下、蔵田はさらに向学心を高め、大正9年（1920）、中條精一郎の紹介で佐藤功一【*5】の率いる早稲田大学の選科生となった。分離派建築会【*6】が旗揚げされた年である。

大正11年（1922）の「平和記念東京博覧会」【*7】の仕事に技術員として参加したことをきっかけに、蔵田は分離派建築会のメンバーに加えられた。初の東大外からの会員である。猛烈な向学心、語学とスケッチの能力、雑誌編集に精通し、かつ建築の実務にも詳しいといった点が高く評価されたのであろう。

佐藤功一との出会いから、建築評論の世界にも関心を抱くようになった。早稲田系の出版社である南北社は、『建築と装飾』や『建築評論』といった雑誌を次々と発刊。佐藤と縁のある今和次郎【*8】や美術評論の森口多里、建築評論の黒田朋信などが寄稿していた。『建築評論』は佐藤の愛弟子である中村鎮【*9】が編集長を勤めていたが、中村の後は蔵田が最後の編集長を務めた。蔵田の編集者としての能力と感性は三橋四郎と佐藤功一、そして中村鎮らによって育てられたのである。

大正11年、猛勉強の成果を活かす機会が訪れた。洪洋社の建築文化叢書の『エジプト

の文化と建築』【*10】の執筆を担当した。さらに2年後には『印度の文化と建築』【*11】、そして『近代建築思潮』【*12】と続いた。後者は、日本初の近代建築史の通史であり、その後の近代建築の優れた紹介者としての地位はこの本によって確定した。

蔵田の初期の論考で注目すべきは『アルス建築大講座』の中に執筆した「建築論」【*13】である。そこでは、マルクス主義芸術論の影響を受けて、表現主義の限界と、建築の社会性への重視が主張されている。それは個人の創造性を高らかに謳い上げていた分離派建築会の芸術至上主義に転換を促すものであった。



海外渡航を契機として

蔵田の建築思想に決定的な影響を及ぼしたのは昭和5年（1930）から6年（1931）にかけての海外渡航の体験である。編集同人であった『国際建築』誌の編集長・小山正和との約束で、ドイツを中心とする最新の海外情報を日本に伝え、即時的に雑誌に連載する約束が結ばれていた。およそ1ヵ月足らずのタイムラグで海外情報を伝える「国際雑記」は『国際建築』誌上を賑わせた。ワルター・グロピウスを始めとする新進気鋭の建築家へのインタビュー、数々のジードルンクの紹介、作品展や博覧会の報告、なかでも昭和6年の都市と住宅をテーマとした「ドイツ建築博覧会」に関する報告は、パウハウスに留学中の山脇巖【*14】と協力してまとめ上げたもので、ドイツ本国やフランスなどの西欧諸国の報道に先んずるかたちで行われ海外でも話題を集めた。これ以降、『国際建築』は海外の建築雑誌との交換が行われるようになった。

京都大学の学生であった西山卯三【*15】は、当時を回顧して「私が蔵田氏を知るようになったのは、雑誌『国際建築』を舞台とする、その旺盛な文筆活動を通してであって、（中略）生の事情を知りうべくもない建築科学生たちにとって、彼は日本の建築界のボスたちが白眼視していた欧州の“新興建築”の息吹を目の当たりに伝えてくれる大変博学の解説者のように見えた」【*16】と語っている。



設計活動にみる特徴

蔵田の海外渡航以前の仕事は、そのほとんどが関根建築事務所の担当作品である。「百十三銀行本店（現・エスイーシー電算センター）」（1926）、「京王閣遊園」（1927）や「旧多摩聖蹟記念館」（1927）は、ゼツェッションや表現派に強く影響されている。

蔵田にとっては“新しい住宅”が最大の関心事であった。ラスキンとウィリアム・モリスの影響から生活と芸術の融和を求め、生活改善運動への関心を高めていたからである。住宅改善調査委員会が大正9年に発表した「住宅改善の方針」が指標となっていた。①イス式の導入、②家族本位、③実用的な設備、④実用的な庭園、⑤実用的な家具、⑥共同住宅化、の6つの指針である。1920年代に蔵田が取り組んだ住宅は、いずれもこの指針をもとに設計されている。家具と共同住宅に関しても生涯、特別の関心を抱き続けた。

1920年代の住宅作品として「坊城邸」（1928）、「米川邸（現・野田邸）」（1928）、「勝野邸」（1929）がある。「坊城邸」は、関根建築事務所の担当作品で、モダニズム住宅の最初期のものである。木造ながら鋭角的なデザインを取り入れた外観、造付け家具、椅子、テーブルなどインテリアに構成の美学を展開している。

「米川邸」は、ロシア文学者・米川正夫の自邸である。米川の日記には、北欧文学の翻訳者の「宮原晃一郎の義弟に当たる建築家の蔵田周忠氏に設計一切を任せて、当時流行の分離派形式の家」を建てたとある【*17】。玄関ホールを始め、随所に構成主義の造形が採用され、食堂の造付けソファや本棚のデザインなどにも蔵田の感性が反映されている。

「勝野邸」は、平面計画上も外観も当時であってはごく平均的な和風住宅であるが、道路側外観にモダンな雰囲気演出する工夫が見られる。瓦屋根の軒先をシャープに見せるために軒鼻に銅板仕上げの水平材をまわしている。トップライトを持つ階段室は、漆喰と木部との対比が美しく、正面外観のポイントとなっていた。在来の和風住宅や文化住宅の中に、モダンな意匠を取り込むことを試みていたことがうかがえる興味深い事例である。



上——旧多摩聖蹟記念館（1927） 明治10年代、明明天皇は近くの蓮光寺の山川にウサギ猟や鮎漁のために4回ほど行幸された。1930年、明明天皇の偉業を讃えるために、元・宮内大臣の田中光顕が中心となり、当時の多摩村の人々の寄付や協力によってつくられた。関根建築事務所の担当作品であるが、蔵田が入所した頃より、徐々にモダニズムの傾向を強めていくようになる
中・下——百十三銀行本店（1926） 関根建築事務所の担当作品。左右対称の外観、矩形の中に立柱を収めたユニークなファサードを特徴とする。これは不動貯蓄銀行の支店に良く見られる手法で、関根要太郎の好みが反映されている。幾何学的な細部装飾も印象的である。内部の階段周りは表現派風の曲線をみせる。様式崩壊期からモダニズムへの移行期を示す作品

【*10】『エジプトの文化と建築（建築文化叢書 第1編）』濱岡周忠著（洪洋社 1922）
【*11】『印度の文化と建築（建築文化叢書 第7編）』森口多里・濱岡周忠著（洪洋社 1924）
【*12】『近代建築思潮（建築文化叢書 第12編）』濱岡周忠著（洪洋社 1924）
【*13】蔵田周忠「建築論」『アルス建築大講座 第7巻（建築篇）』（アルス 1927）蔵田の他にも、山崎静太郎、遠藤新、野田俊彦、滝沢真弓の4人が論考を寄せている
【*14】山脇巖（1898～1987）藤田家の三男として長崎県に生まれる。東京美術学校図案科第二部（建築科）卒業後、横河工務所に入所。山脇道子と結婚し、夫婦でパウハウスに学び、1932年に帰国。新建築工芸学院を始めとする美術系の学校で教鞭を執った後、日本大学芸術学部教授
【*15】西山卯三（1911～94）京都大学在学中に建築運動団体デザムを結成。卒業論文「住宅計画の科学的研究」以後、一貫して庶民住宅の研究と啓蒙活動に従事した。一度、石本喜久治の事務所に勤めるも退職。住宅営団を経て京都大学に職を得る。終戦後の1947年に出された「これからのすまい」（相模書房）は、戦後住宅の指標となった
【*16】『建築学入門—生活空間の探求（上）』西山卯三著（勤草書房 1983）
【*17】『鈍・根・才—米川正夫自伝』米川正夫著（河出書房新社 1962）



坊城邸（1928）木造ながら、鋭角的な外観を持つ作品で、竣工時には関根要太郎の作品として雑誌『建築画報』の表紙を飾った。蔵田は単なる製図工としてではなく、関根のパートナーとして迎えられており、作品によっては共同者として名前が併記されることもある。平面は関根がまとめ、立面や内部造作は蔵田が担当することが多かったという。ライト風、アール・デコ、構成主義などの潮流を部分的に取り入れ、線と面による分割と幾何学性を体現させた作品

白い箱モダニズムの実践

海外渡航後、蔵田は独立して設計事務所を構えた。と同時に、住宅作品の意匠は大きく変化し“白い箱モダニズム”と呼ばれる作風へと移行していった。

昭和10年（1935）以降は、市浦健【*18】や土浦亀城【*19】といった先人にならって石綿スレート板を用いた木造乾式工法による白い箱モダニズム住宅の実践が開始される。その最大の計画が「等々力ジードルンク計画」である。蔵田は、久米権九郎【*20】と共同してジードルンクの計画立案を試み、その構想を東京横浜電鉄に持ち掛けた。全体計画は来日中のブルーノ・タウト【*21】に依頼し、15人の近代建築家による日本版の「ヴァイセンホーフ・ジードルンク」【*22】が計画された。等々力に設定された敷地面積は56,000㎡で、1区画約1,000㎡の30区画が用意され、電機変電所や暖房管理の中央統治プラント、食糧と薬品を扱う商店なども考慮されていた。住宅計画に関しては、外壁は石綿スレートあるいはモルタル仕上げとすること、屋根はフラットルーフを用いることなど、統一的な規定が設けられていた。15人の建築家が、一定のルールの下で住宅群を計画し、理想的な住環境を実現しようとしたのである。

最終的に電鉄会社の理解が得られなかったことから、計画は頓挫してしまった。しかし、蔵田の執念からか、当該敷地に蔵田の設計による4軒の住宅のみが実現された。「等々力住宅区計画」と呼ばれるものである。「斎藤邸」（1935）、「三輪邸」（1935）、「古仁所邸」（1936）、「金子邸」（1936）の4軒はいずれも、外壁には石綿スレート、内壁と天井にはテックスを用いた木造乾式工法によるものである。それらの外観を特徴づける大きな開口部と庇の出は、夏季と冬季の日照条件と雨仕舞を考慮したものである。小屋裏の換気を図るために軒を30cm程度張り出させるなど、採光や通風などの基本的な居住性能に対する解決策も提示している。乾式工法の弱点である雨仕舞に対し、外壁の石綿スレートとその接合部であるジョイナーの改良をひとつの課題として取り組んでいた。

蔵田は「等々力住宅区計画」以後、昭和14年（1939）までに合計で8件の乾式工法の住宅を手がけている。1930年代も後半に入ると、日本の気候風土への不適合が指摘されるようになり、乾式工法への関心が薄らいでいく中、蔵田は最後までその可能性を追求していたのである。

生活のデザイン

蔵田は、昭和2年（1927）から18年（1943）まで東京高等工芸学校（現・千葉大学工学部）の講師を務めていた。当時の学生で、後に日本の近代家具の第一人者となる豊口克平は、蔵田のことを「パウハウスの理念を語る高等工芸ただひとりの教官」【*23】と回顧している。この時、蔵田の周辺にいた若い人たちによって、新時代の生活工芸を求める同人の実験工房的存在として生まれたのが「型而工房」であり、蔵田はその主催者となった。同潤会代官山アパートの蔵田の部屋が活動の拠点となっていた。その名称は、形而上学の“形”を“型”と変えることで、プロトタイプに通ずるニュアンスを持たせ、さらに「ウィーン工房」【*24】のイメージを重ね合わせたものである。そこでは家具の調査・研究・製作・販売といった活動を通じて日常生活の変革が模索された。

一方、早稲田大学の佐藤功一や今和次郎、竹内芳太郎【*25】といった人々との交流から、生涯にわたり“民家”への関心を抱き続け、日本中の民家を訪ね歩くことを趣味としていた。戦後にまとめられた『民家帖』【*26】にはその想いが綴られている。常に前衛であり続けたかに見える蔵田の姿勢は、実は市井の人々の生活に対する温かい眼差しに支えられたものであった。

蔵田の設計した白い箱モダニズム住宅は、70年近くを経た今日、すべてこの世から消え去ったと思われてきたが、近年、武蔵工業大学の岡山理香さんによって「三輪邸（現・O邸）」の現存が確認された。その他では、文化住宅の香りを伝える1920年代の住宅「米川邸」と「勝野邸」が現存している。いずれのオーナーも、維持に手のかかる住宅ながら、不思議な魅力を感じ、愛着を持って住まれてきたという。それらはアーツアンドクラフト的な手触りと温もりを持つが故に、長年にわたり愛され続けてきたのである。*（図版解説も筆者）

【*18】市浦健（1904～81）東京都生まれ。東大建築学科卒業後、住宅営団に入り、研究部企画課長などを歴任。公共住宅の規格化、標準化の問題に取り組んだ。日本大学工学部予科教授。1952年に市浦建築設計事務所設立。61年には都市開発コンサルタントを設立し、多摩ニュータウンなどの多くのニュータウン計画や都市計画、再開発を手がけた。【*19】土浦亀城（1897～1996）茨城県水戸市生まれ。東大在学中、友人の遠藤新に誘われて「帝国ホテル」の仕事を手伝う。信夫人とともに、3年間F.L.ライトのタリアセンで働く。帰国後、大倉土木（現・大成建設）に入社。1934年に独立。作風は当初のライト風からインターナショナル・スタイルへと転じ、乾式工法による一連の白い箱モダニズムの住宅を設計。現存する「自邸」はその最良の作品。住宅以外では西銀座の「トクダビル」、「強羅ホテル」などがある。【*20】久米権九郎（1895～1965）東京都生まれ。1923年に渡独。シュツットガルト州立工科大学で学び、「耐震法による日本住宅の改良」の研究で工学博士を授与。帰国後、友人の渡辺仁とともに渡辺久米建築事務所を開設。1932年、久米建築事務所開設。来日中のB.タウトと共同で「大倉邸」の設計を手がけた。中国大陸においても設計活動を展開した。【*21】ブルーノ・タウト（1880～1938）（INAX REPORT No.173、p.6参照）【*22】ヴァイセンホーフ・ジードルンク 1927年7月から10月にかけて、シュツットガルトの近郊ヴァイセンホーフの丘を会場に、「住宅」というテーマで開催された展覧会。主催はドイツ工作連盟で、副会長のミース・ファン・デル・ローエが全体計画を手がけた。近代社会に相応しい新しい生活の器を示すことを目的に、独立住宅、2戸建住宅、低層連続住宅、中層集合住宅など、さまざまな形式で建設。合計21棟63戸からなるモデル住宅団地。【*23】「型而工房から 豊口克平とデザインの半世紀」グループ5・豊口克平編（美術出版社 1987）【*24】ウィーン工房（INAX REPORT No.171、p.6参照）【*25】竹内芳太郎（1897～1987）早稲田大学在学中、今和次郎に師事し、各地の民家を調査。卒業論文の飛騨白川郷の民家調査は、民家を社会経済的観点から考察した初のもの。卒業後、農村住宅改善の運動に従事。晩年は日本民俗建築学会の会長。【*26】『民家帖』蔵田周忠著（古今書院 1955）



客間より 畳に座って、庭が一番美しく見えるようガラス窓の枠は切ってある。腰板のない雪見障子と欄間の洗練されたバランス。木々の向こうは、等々力渓谷

三輪邸（現・O邸）

【建築概要】
所在地：東京都世田谷区
規模：平屋
構造：木造
竣工年：1935年

「等々力住宅区計画」のうちの1棟。リタイアした夫婦のために和室を中心として、コンパクトに設計されている。当時、ここには乾構築（トロックン・バウ＝乾式工法）で4棟建設されたが3棟は取り壊されたため、今日、唯一のものである。陸屋根は、切妻に改築されているが、室内は多くオリジナルを保っている。“デザイン”について声高に語ることもなかった蔵田であるが、洗練された手腕が発揮されている（岡山理香/武蔵工業大学 准教授）

上—南面外観 木々の間から往時のままの水平に延びる庇が見える。「陸屋根の頃は、上にのぼって夏の星を見たものです」とOさん。左は増築された2階層
下—竣工当時 乾構築により外壁はスレート板（2×3尺）と木の堅羽目を部分的に使用。そのため、“真っ白な箱”とは、また違った印象を与えた
p.12の平面図—プランは、厨房以外和室であった。6畳の居間を中心として東側に厨房と3畳の茶の間、浴室や洗面所等の水まわりを配し、西側に8畳の客間。居間と客間の南側に広縁があり、庇によって冬暖かく、夏涼しいよう陽射しがコントロールされる

左—厨房の戸棚 限られたスペースに、流し、レンジ、戸棚を壁全面に造り付けていた。当時、最先端の、今でいうシステムキッチンである。「型而工房」の成果でもある
右—洗面所 ほぼ原形のままで、どこか懐かしい。壁面のテックス張りには「柔らかな土壁に似ているので」室内に用いられた。ここにオリジナルが見られ、貴重である



米川邸（現・野田邸）

【建築概要】
 所在地：東京都杉並区
 規模：地上2階
 構造：木造、一部RC造
 竣工年：1928年



上—玄関と階段との境を分節する構成的デザインのスクリーン
 下—食堂の造付け家具 正面奥に台所があり、食器棚や両面ハッチが一体的にデザインされている

表紙図版—玄関周り 1920年代の作品では、特に玄関周りのデザインに力点が注がれている。玄関床のタイルや照明器具はオリジナル



外観 ロシア文学者・米川正夫が1944年まで過ごした住宅。外観は急勾配の切妻屋根を持つ文化住宅であったが、大きく改変している。玄関周りは旧状をとどめる

上—玄関脇の応接室 暖炉やステンドグラスの丸窓が文化住宅の香りを漂わせる。隣接して鉄筋コンクリート造の書斎兼書庫がある。鉄製のドア、スチールサッシュ、鉄のシャッターを備える。震災の体験から貴重な外国文献を守ることに主眼が置かれた
 下—蔵田がデザインした書棚



勝野邸

[建築概要]
 所在地：東京都中野区
 規模：地上2階
 構造：木造
 竣工年：1929年



上—洋風応接室、下—座敷 当時の郊外住宅の典型で、玄関脇に洋風応接室を持つ洋折衷住宅。洋間は1室のみで、他は床の間付きの座敷と次の間の2間が並ぶ

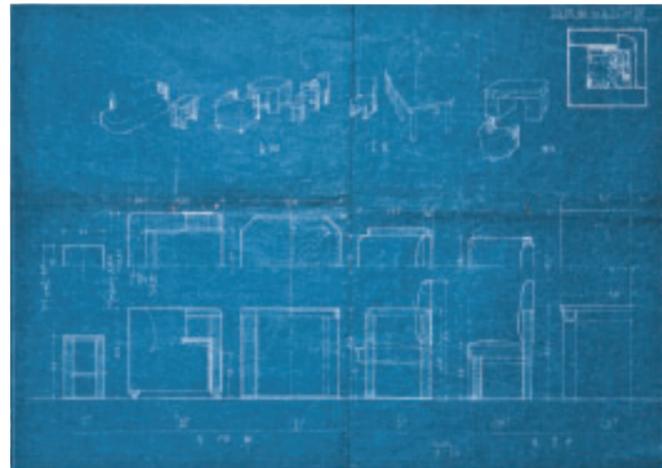
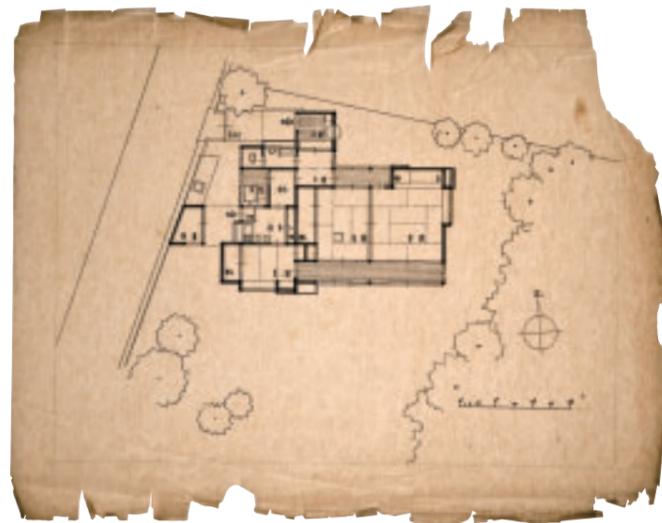
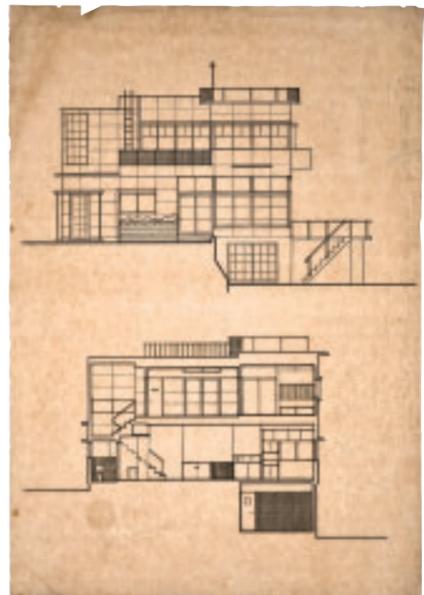
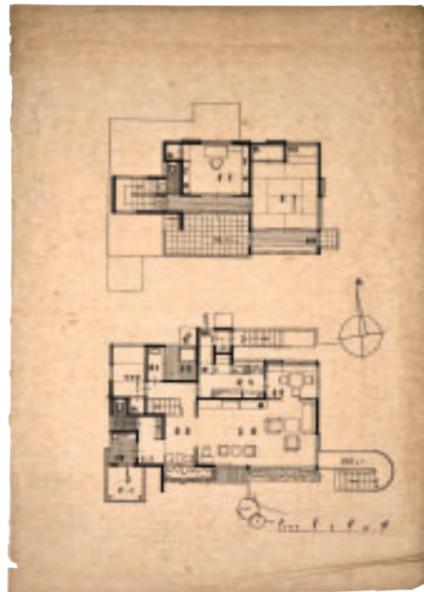


上—正面外観、下—竣工当時 外観を特徴づけるのは採光用の窓を持つ階段室の意匠で、漆喰の白と木部との対比が美しかったが、現在は板で覆われてしまった



右—玄関内部 構成主義のデザインによるガラス戸と欄間、そこからもれる光が、和洋折衷住宅にモダンな雰囲気を与えている
 次ページ—玄関 軒先周りに水平材をまわし、櫓を隠すことでキュービク的な形態表現を意図している。下見板の外壁、白ベキ塗り窓枠、竹を使った戸袋、そして構成的な意匠を見せる引戸、軒の水平材には銅版が張られている





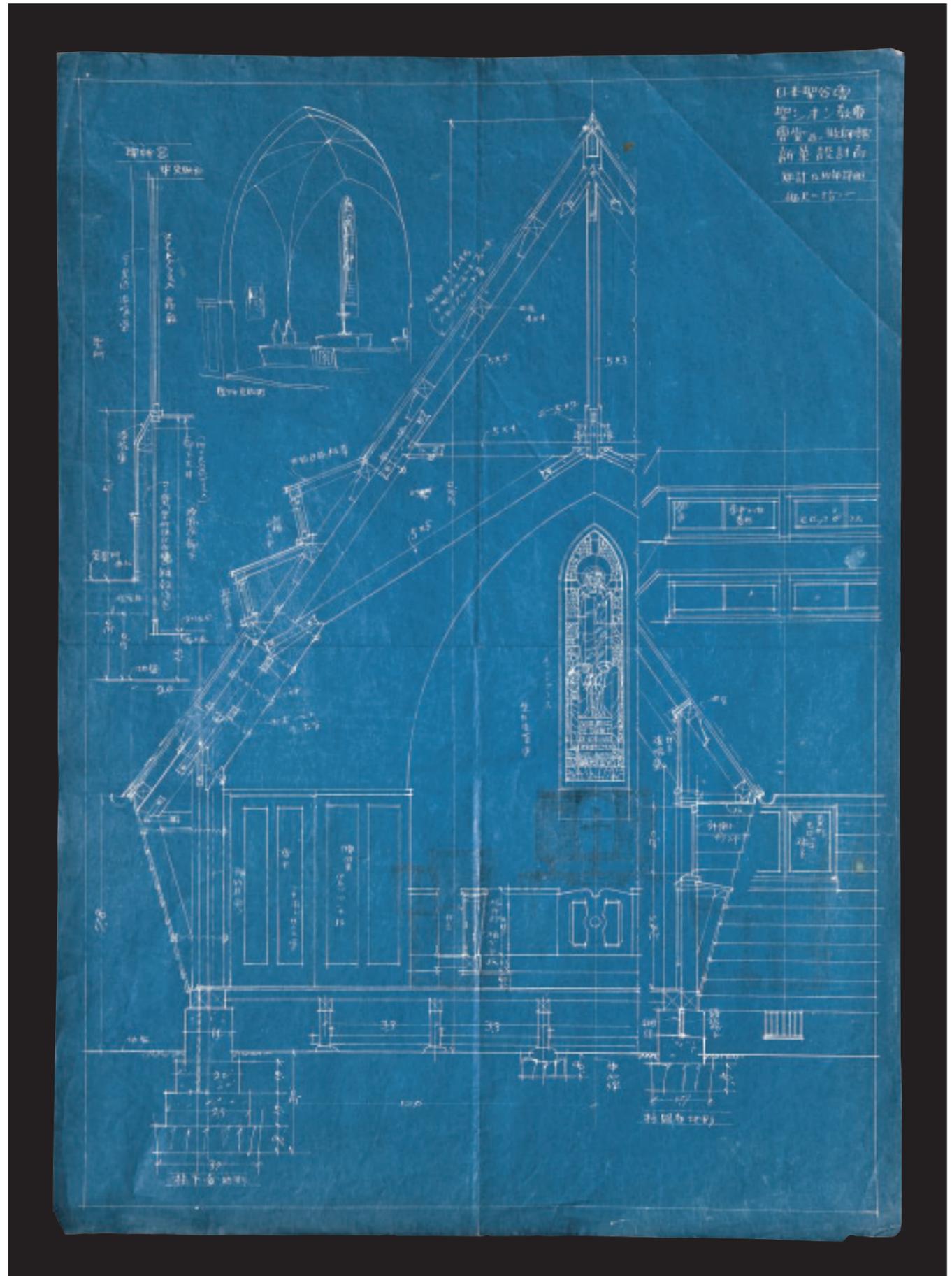
1 古仁所邸(1936) 「等々力住宅区計画」4軒の1つ。木造乾式工法で地下1階、地上2階。傾斜地という地形を巧みに活かした配置、平面計画で、実質的に3階建て。木造乾式工法の外装のスレートがそのまま外観に表現され、フラットルーフの特性を活かし2階に屋上庭園のようなバルコニーが設けられている。写真は居間部分。左手奥の食堂との境も仕切りはすべてカーテン。壁と天井にはテックスが使われている(図面:武蔵工業大学蔵田文庫所蔵、写真:「現代住宅1933-40」(国際建築協会)所収)

2 三輪邸平面図

3 坊城邸家具設計図(1927) 1924年頃から東京高等工芸学校の森谷延雄との交流があり、家具デザインへの関心を高めていた。「坊城邸」の家具は、「型而工房」を主催し、部材の規格化と生産の合理化を図るようになる前の家具デザイン

4 国立近代美術館で開催中の「グロピウスとバウハウス展」の会場にて 1954年5月、来日したW.グロピウス夫妻と

2~4 武蔵工業大学蔵田文庫所蔵



聖シオン会堂(1926) 関根建築事務所ではなく、蔵田が単独で請けた仕事と思われる。家具は森谷延雄の「木の芽舎」が担当。これを機に、家具への関心が高まり「型而工房」の活動へと展開する(武蔵工業大学蔵田文庫所蔵)

蔵田周忠 人と作品

1895-1966

【特集1】

生き続ける建築
11

略歴

- 1895年(明28) 山口県萩市の濱岡家に生まれる
- 1913年(大2) 私立工手学校建築科卒業、三橋四郎建築事務所製図員
- 1915年(大4) 曾禰中條建築事務所製図員、伯父の蔵田家を継ぐ
- 1920年(大9) 早稲田大学理工学部建築学科選択学修
- 1921年(大10) 平和記念東京博覧会技術員
- 1922年(大11) 関根建築事務所技師(～1926)、『エジプトの文化と建築』(洪洋社)
- 1924年(大13) 『近代建築思潮』(洪洋社)、『印度の文化と建築』(洪洋社)
- 1926年(昭1) 『近代英国田園住宅抄』(建築画報社)、『ロダン以後』(中央美術社)、『ルネッサンス文化と建築(上)』(洪洋社)
- 1927年(昭2) 東京高等工芸学校講師(～1943)、『ルネッサンス文化と建築(下)』(洪洋社)
- 1930年(昭5) ドイツ留学(建築工芸設計・意匠研究)
- 1931年(昭6) 蔵田周忠事務所設立
- 1932年(昭7) 武蔵高等工学校教授(～1949)、武蔵高等工業学校教授、『欧州都市の近代相』(六文館)
- 1933年(昭8) ドイツ国文化勲章「ローテクロイツ」受章、『近代的角度』(信友堂)
- 1934年(昭9) 『日本民家の模型製作に就いて』(大日本連合会青年団)
- 1935年(昭10) 『現代建築』(東学社)
- 1936年(昭11) 『等々力住宅区の一部』(国際建築協会)
- 1939年(昭14) 日本建築学会常議員、『小住宅厨房の研究』(同潤会)
- 1940年(昭15) 『陸屋根』(相模書房)
- 1942年(昭17) 『ブルーノ・タウト』(相模書房)
- 1943年(昭18) 『建築透視図』(アルス)
- 1944年(昭19) 『部屋の使い方』(住宅営団)
- 1947年(昭22) 武蔵高工建築学科如学会会長、『建築の製図』(相模書房)、『小住宅の設計』(主婦の友社)
- 1948年(昭23) 日本建築学会会館委員会幹事
- 1949年(昭24) 日本建築学会理事、日本建築学会評議員、日本建築学会建築企画原案作成委員、日本建築学会学会賞委員・部長、武蔵工業大学建築学科主任、武蔵工業大学教授(～1966)、『製図』(彰国社)、『商店建築図集』(彰国社)
- 1950年(昭25) 日本建築学会建築講義録刊行準備委員
- 1951年(昭26) 早稲田大学第一理工学部兼任講師(～1952)、東京藝術大学美術学部講師(～1962)
- 1953年(昭28) 『グロピウス』(彰国社)
- 1955年(昭30) 東海大学建築学科講師(～1965)、『民家帖』(古今書店)
- 1956年(昭31) 日本建築学会評議員、日本建築学会学術委員、中央建築士審議委員会、『小住宅の設計(改訂版)』(主婦の友社)、『木造と耐火の近代的な小住宅』(主婦の友社)



婦美子夫人と



民家研究の仲間たち 左端は今和次郎、右端は竹内芳太郎、中央が蔵田(写真2点とも：武蔵工業大学蔵田文庫所蔵)

- 1957年(昭32) 『塔のある風景』(彰国社)
- 1958年(昭33) 日本建築学会建築大辞典刊行委員、日本建築学会建築歴史意匠委員、学校施設基準規格調査委員(文部省)、『生活空間の創造』(W.グロピウス著、共訳)(彰国社)
- 1960年(昭35) 早稲田大学工学博士号取得
- 1961年(昭36) 建設大臣表彰状および銀盃受賞、黄綬褒章受章
- 1965年(昭40) 勲四等瑞宝章受章、『近代建築史』(相模書房)
- 1966年(昭41) 国立第2病院で逝去(71歳)、武蔵工業大学名誉教授

主な作品

※印は関根建築事務所での担当

- 1924年(大13) 八木邸(東京)
- 1925年(大14) 六華倶楽部* (山形)、加納川邸(東京)、小泉邸(東京)、仏蘭西現代美術展覧会表示塔(東京)
- 1926年(昭1) 宮原邸(東京)、蔵田邸(東京)、森邸(東京)、大竹邸(東京)、聖シオン会堂(東京)、百十三銀行本店* (北海道)
- 1927年(昭2) 協和銀行九段支店* (東京)、協和銀行大阪土佐堀支店* (大阪)、京王閣遊園* (東京)、旧多摩聖蹟記念館* (東京)、月華荘(東京)
- 1928年(昭3) 三崎神社秩父宮御登山記念館* (埼玉)、坊城邸* (東京)、内田自動車株式会社の建築(東京)、米川邸(東京)
- 1929年(昭4) 石川邸(神奈川)、勝野邸(東京)
- 1931年(昭6) 東京帝室博物館コンベ応募案
- 1932年(昭7) 福沢邸(東京)、小原邸(東京)、第四回発明博覧会 エジソン館(東京)
- 1934年(昭9) 内田邸(東京)
- 1935年(昭10) 斎藤邸(東京)、三輪邸(東京)
- 1936年(昭11) 古仁所邸(東京)、金子邸(東京)、安川邸(福岡)
- 1937年(昭12) 貝島邸(東京)、白柱居(神奈川)
- 1938年(昭13) 甲府市庁舎(一部完成)(山梨)、山崎邸(東京)、田中邸(神奈川)
- 1939年(昭14) 武蔵工業専門学校(東京)
- 1949年(昭24) 山口市庁舎(山口)、永祥寺(北海道)
- 1950年(昭25) 山口市立小学校講堂(山口)
- 1951年(昭26) 千葉県自治会館(千葉)、山口市立白石中学校公舎(山口)
- 1952年(昭27) 東京都庁舎コンベ応募案
- 1953年(昭28) 杉並区立杉並公民館(東京)

取材協力・資料・写真提供

石井陽/エスイーシー/勝野和郎/菊地潤/多摩市教育委員会/野田澄子/武蔵工業大学蔵田文庫 (50音順)

【次号予告】

次号(4月20日発行)の「生き続ける建築」は吉田鉄郎です。

*特に明記のない写真は、2008年4～10月に新規撮影したものです。